乗り越えようとする人物に共感を寄せる多い。

も日本の赤十字思いわれる医師・高生涯を描いた『夜明』（文春文庫）

12歳の時の感動的

高松は徳川慶喜奏詰医師で、パリ帝する慶喜の弟・1して渡欧し、そ2に留まって医学「神の館」で最新すんだ。帰国後は を懸けて榎本武揚し、北へ。箱館病 軍方関係なく負傷 にあたった。

個より公を優先した人々

読者としてはこのクライマックスともいえる箱館戦争に関心を寄せがちだが、吉村は欧州の旅に多くのページを割き、高松の博愛精神の原点が「神の館」にあったことを丁寧に描き出した。高松の医療活動は高い評価を受け、新政府からは要職への就任を要請されるが一切断って市井の医師となり、貧しい人々を無料で診察する医師とその支援者の団体、同愛社を設立。死の間際まで診療を続けた。

先ごろ、NHKの連続テレビ小説「あさが来た」に実業家・渋沢栄一がちらりと登場した。渋沢は高松と同じ船で渡欧し、高松のパリでの生活や同愛社の設立を支援した一人だった。番組では今、炭鉱の開発や銀行の設立に携わった主人公のあさ（広岡浅子）が女子教育に貢献する姿が描かれている。恵まれた者はその恵みを社会に還元する義務があるというノーブレス・オブリージュの精神はこの時代、医療や教育の基盤づくりの原動力だった。

私が吉村の描く維新に惹かれるのは、その功績が誰か一人の英雄のものではなく、個より公を優先した一人ひとりの尊い志の集合体であることを生涯を通じて示し続けたからである。

（ノンフィクション作家）

2016.2月21日（日）日本経済新聞 朝刊

坂の途中の家

角田 光代著

のが辛い小説である。ついからではない。むしろ。面白いけれど息が詰まばしば逃れたいと思っても末が気になる。読み続けままで知らなかった世界

ドる

いていく。婚約、結婚、妊娠、出産、育児などについて、それぞれの地域・家庭・世代がもつ常識と非常識の線引き。その厳然としてある見えない制度に人は縛りつけられ、自分が異常と

砂上の楼閣に

若林 宣著

副題に「つながらなかった大東亜共栄圏」とあるように、戦前・戦中の日本及びその支配地域の交通網がつながりを欠いていた事実を明らかにする。例えば、日本と中国、シンガポール、ビルマ（現ミャンマー）などを結ぶ「大東亜縦貫鉄道構想」では線路や車両の規格の違いをあまり考慮していなかった。足元がおぼつかないのだから、大東亜共

支配にとって重要な役割を果たした大連港は南満州鉄道が世界商品たる満州産大豆の輸出拠点に育てた。植民地経営を担った満鉄の面目躍如だ。ただ、こうした成功例は数えるほどだ。

著者は乗り物に関する記事を雑誌などで執筆するライター。本書では、統計資料のほか時刻表や路線図などもふんだんに使い、陸・海・空にわ

文庫

■『風俗時評』花森安治著 雑誌「暮しの手帖」を支えた名編集長が1952年ごろに日本人の風俗や服飾について語った本の復刊。ラジオ番組の活字化だけに語り口はやわらかいが、他人に流される没個性の服の流行、特権意識や見えが表れた服にはめっぽう辛口。60年以上前の文章と感じさせないのは、花森が批判した日本人の意識がさほど変化していないせいか。（中公文庫・620円）

新書

■『日本軍はなぜ満州大油田を発見できなかったのか』岩瀬昇著 日本が太平洋戦争に突き進む大きな動機が石油であったことは知られている。本書は日本が南方の石油を求める道筋を、石油政策や油田開発の分析を通して描いている。旧樺太や旧満州での油田開発の苦戦や、石炭から石油をつくる「人造石油」の失敗を経て、軍内部で「南進論」が台頭する経緯は興味深い。（文春新書・820円）

■『百人一首の謎を解く』草野隆著 藤原定家選との説はあるものの、実は「誰が何のために」作ったのかはっきりとは分かっていない百人一首。「賀の歌」や「よみ人しらずの歌」が見当たらず、ふさわしい有名歌人が落ちている。国文学者の著者はそこに、「追善供養」といった意図を推察する。依頼者を喜ばす「サービス」の視点から選んだ痕跡も色濃いという。（新潮新書・740円）

〈巻頭特集〉
揺らぐ増益シナリオ、日本株の耐性は
企業業績
黄信号
世界経済の不透明感が漂うなか
リタス
機はあるか
3つのシナリオ
が焦点
電力